暴力と啓示 ——フラナリー・オコナー論

中 村 一 夫

別稿において私はレイモンド・カーヴァー（Raymond Carver）との関わりに始まって，J.C.オーツ（Joyce Carol Oates）の作品における暴力性について論じた[1]が，その折オーツの「ピクニックの青年たち」（Boys at a Picnic）はいやがおうでも，フラナリー・オコナー（Flannery O'Connor）の「善人見出し難し」（A Good Man Is Hard to Find)を思い起こさせた。オーツについての論評者たちはすでに多くが，オーツについての幾多の論文において，オコナーを引き合いに出している[2]が，いかなる読者にとってもこの連想は自然に起こることであろうと思う。それはいうまでもなく，この両者がその作品において暴力を描いていることが顕著であるからである。そこでここでは短編集『善人見出し難し』の中の短編数編及び『高く登って一点へ』（*Everything That Rises Must Converge*)の中の二編を中心にオコナーの小説における暴力性について考察してみたい。

1

短編集『善人見出し難し』のタイトル・ストリーである作品はまったく怖るべき話である。初めてこの話を読んだ場合と断わっておくが，これほどの残虐性を感じさせ，衝撃を与える作品をわれわれは多くは思い起こさないだろう。（私自身はトルーマン・カポーティ Truman Capote の『冷血』（*In Cold Blood*）を想い起こした。）話の中では，この家族がフロリダへドライヴに出かける前に，ミスフィット（Misfit）と自称する囚人が連邦刑務所から脱走したという伏線はあるが，前半から中盤までの話は明るくにぎやかな家族のドライヴのほほえましい，いかにもありふれた情景である。（ちなみに，この情景は家族の一人一人が実に生き生きと描かれていると私は思う。）しかしそれと突然の暗転，その急激さとそこで行使される暴力の非情さは驚くほどのコントラストをもって描かれるので，読者はそのあまりの落差によって作品に違和感を抱くほどである。（もちろん作者の狙いは作品の後半の部分にあるのだが，そうはわかっていても，一個の短編小説としては違和感が残り，容易に納得を許さないところもある。）

この話の含む意味は，再読すれば多少変わってくるのだが，それでもその激しさは消そうと思ってもけして「脳裏から離れない」ほどの迫力がある。この短編の暴力性に驚くのは私ばかりではない。例えばマーガレット・アーリー・ウィット（Margaret Early Whitt）によれば，オコナーの小説が世に出たとき，書評家たちも，彼女の作品における描写の辛辣さや暴力性やグロテスクさや風変わりさなどにどぎもを抜かれていた様子を知ることができる。ウィットは「オコナーの小説に初めて接したとき，おそらく読者はそこに暴力が表面に著しく存在するので面喰らうだろう」と書いている。そして続けて，信じられないほど歪んだ登場人物たちへの拒否反応からオコナーは読者に無視されるか，またはその異様さによって［オコナーの作品は］読者の頭から離れないだろう。そしてどっちにせよ，

オコナーの物語はあまりに著しく，また不快なほどに，他の作家のものと違っているので忘れられることはないだろう，という意味のことを述べている。[3]

一方「善良な田舎者」(Good Country People) は，上記の作品とちがってそこでは殺人や傷害の事件は起らない。

主人公ハルガ（生名はジョイ）は離婚した母親と農場の屋敷に二人で暮らしている32才になる未婚の娘である。ジョイ（joy）とは皮肉にも，彼女は幼いときの狩猟で誤って銃を発砲したために片脚を失い，義足をつけて暮らしている。当然と云おうか，彼女は田舎の人間には珍しく大学に進み，しかも哲学の学位をとってしまった。予想されるように彼女は笑顔を忘れ，眼鏡をかけ，無神論者となり，孤立し，孤高といった態度で生きている。その彼女は，高尚で堅固な思想の世界に住んでいるにもかかわらず，それとは裏腹に「善良な」田舎者の聖書のセールスマンだという青年にまんまとだまされて，卑わいな会話のやりとりをし，屈辱的な扱いを受けたあげく，命ともたのむ義足を持ち逃げされてしまう。

しかし精神的な意味では，この場合もきわめて暴力的な行為といわざるを得ないだろう。

とにかくこのように物理的にせよ精神的にせよ，オコナーの作品の中には暴力や悪徳や残酷さが満ちている。

その他の作品の暴力について簡単に述べれば，「火の中の環」(A Circle in the Fire) においては，主人公の農場主は自分の農場と森がいつか燃えてしまうのではないかと絶えず怖れているが，そこへ三人の少年たち（その中の一人はかつて彼女が雇っていた使用人の子供である）が農場にやって来て居座って出て行かず，さんざん勝手な振舞をしたあげく，森に火を付けてしまうし，「注意は人のためならず」(The Life You Save May Be Your Own)[4] では農場経営者の母娘のところに修理道具を下げた男がやって来て，彼は母親に口達者なことを言って廃車同然の車を手に入れる。母親の方はおしで耳の聞こえない醜い娘（30才近い）を彼の結婚相手として押しつけることに成功する。男は結婚した女にはホテルという場所で面倒をみなければ男がすたる，などと云ってオンボロ車で新婚旅行のドライヴに出る。しかし100マイル行ったところで彼は食堂に入り，眠ってしまった娘をそのまま置き去りにして車で走り去ってしまう。

「難民」(The Displaced Person) においては，これも農園で起こる話だが，ヨーロッパにおけるユダヤ人迫害を逃れてアメリカに渡って来たポーランド人一家の主がこの農場に雇われ，始めのうちは女主人に重用されていたが，やがて他の貧乏白人や黒人の妬みを買い，最後にトラクターに轢かれて死亡するという惨事が描かれる。

「グリーンリーフ」(Green Leaf) では農場の女主人（主人公）は自分の敷地に侵入してくる使用人の飼っている牡牛に困り，それを殺そうとするが，彼女は逆走して来たその牛に身体を角で突き刺されて死ぬ。「啓示」(Revelation) においては，主人公の女性は，医者の待合室で順番を待っているときに，たまたまそこに居合わせた客の一人である若い娘に耐え難い言葉を吐かれて衝撃を受け，すっかり気持ちが滅入ってしまう。

2

このようにオコナーの小説には程度の差はあるが，読者の意表をつくほどの様々な暴力

的な行為—あるいは怖ろしい光景が描かれる。オーツがエデン郡を創ったように，オコナーのこれらの話が起こるのは，ほとんどジョージア州の片田舎で，それはオコナーの創造した世界であるが，彼女のつくる物語の構成・展開にはおうよそ一つのパターンが見られる。それはその田舎に住む一見平和な安定した日常の世界に異物が侵入してくるといった図式である。

「善人見出し難し」では，まったく平凡で平和な家族の旅行に偶然に脱走犯が侵入して来て，家族全員がいとも簡単に殺害され，「善良な田舎者」の母親は，夫と離婚後，恵まれない娘をかかえ，幸せとは言い難いが，一人で農場を経営して安全に日々を送っているところに，セールスマンが現れる。「火の中の環」の女主人も，不安を抱きながらも，農場をきりもりして経済的には安定した生活をし，いつも自分が恵まれていることに感謝の祈りを捧げているところに家出をした少年たちが入り込んで来る。「注意は人のためならず」の母親は夫の死後，完全に耳の聞こえない白痴の娘をかかえてはいるが，一人で農場を経営しているところに浮浪人のような男が現れ，「難民」の主人公の日常世界にはヨーロッパからの難民が流れ込み，「グリーンリーフ」ではよその飼い牛が敷地に侵入し，「啓示」では主人公の平穏な精神は一人の若い娘の冷然たる言葉の侵入によって破壊される。

このようにこれらの小説では似たようなパターンで、侵入者が主人公に対して暴力を行使する。(ただし「難民」においては侵入者が暴力的なものの犠牲になる。) だがここで描かれる対象は，これらの暴力・悪徳行為を行う侵入者たちではない。侵入者は主人公たちの精神に変化をもたらし，彼女たちに新しい認識を得させる刺激となる存在なのである。「善人見出し難し」は脱走犯ミスフィットの物語ではなく，おばあさんの物語だし，「善良な田舎者」はペテン師のセールスマンの話ではなく，「グリーンリーフ」ではもちろん牛が中心ではない。

これらの侵入者から被害を受ける主人公たちは，上に述べたように一見平和な暮らしをしているように見える。だが主人公たちはそれぞれ問題や欠陥をかかえているのである。それをわれわれの前に顕にし，それを批判するのがオコナーの小説のもつ意味なのである。その問題や欠陥とは，たとえばもっとも顕著なのは彼女たち（主人公たち）の抱く人種的偏見や，下層の貧乏人に対する差別意識などであるが，総じて云えば，彼女たちの日常は精神的に自足しているかにみえるにもかかわらず，その実そうした安定や彼女たちの思考や人生にたいする信念や，キリスト教信仰は表面的だということである。

「善人見出し難し」のおばあさんは明るい性格で，善人そうにみえるが，日常の意識・感覚はまわりの人々とは大分ズレている。おだやかな意味でではあるが，彼女はグロテスクな人物だ。旅支度に彼女は時代離れした服を着て，帽子を被って得意である。その服装は彼女がもし事故に会って死んだら，そのとき自分がレディーだと見られたいというプライドがはたらいているためだが，彼女は昔の“よき南部”に強く執着している。一家がこの事件に遭遇したのも，もとはといえば，彼女がレディーだった昔訪れたことがあるという旧いプランテーションのことを言い出したためであった。(時代錯誤的という意味では，彼女はテネシー・ウィリアムズ（Tennessee Williams）の『ガラスの動物園』（*The Glass Menagerie*）のアマンダや『欲望という名の電車』（*A Streetcar Named Desire*）のブランチをもっと老人にした姿である。)

おばあさんはしきりに世の中がだめになった。暮らしにくくなったと慨嘆している。近

頃はこどもたちが自分の土地に対する誇りを失ったと嘆くし，それは一家が途中休憩するドライヴインの主人も同じで「きょうびはだれを信用していいのかわからんね」（122）[5]「善人はなかなかみつけられんよ。なんでもだんだん恐ろしくなってくる」（122）と言う。

おばあさんは善人ではあろうが，幼児的である。彼女たちの前に現われた男が，新聞に出ていた脱走犯のミスフィットだと気がついたとき，彼女は躊躇なくそれを口に出してしまうし，その後も臆面もなくべらべらと説教的口ぶりで脱走犯と会話を続ける。

彼女は半ば気が動転してはいながらも，ミスフィットに向かってしきりに神に祈れと勧める。そして彼がその話に乗ってくる気配を感じると，改心を勧める彼女のおしゃべりは一層熱を帯びてくる。自分の息子夫婦や孫たちが，おそらく殺されてしまったという状況にあって，この態度はあまりに独善的であり，思い上がりであり，グロテスクで，とてもありそうな事とは思えない。

話の流れから云えば，一つには彼女のおしゃべりとおせっかいがミスフィットをいらいらさせ，一家を死に追いやったのだ。「このばあさん，だれかがたえず銃をぶっぱなしてやっていたら，いい人間になったのになあ」（133）とミスフィットはおばあさんを射殺した後に言うが，彼女のこのおせっかいは自分はレディーだという意識につながっているのである。これがなければこの悲劇は起こらなかったかもしれない。

「善良な田舎者」においては直接の被害者は娘ハルガである。ここでは彼女の愚かさが大いに暴露されることになる。彼女は哲学博士号を持ち，神を信じず，科学を信奉している。この世の中は一切無だという観念をもち，自分の世界を確立しているようにみえる。この点でオコナーの短編の女主人公たちとは全く別の象限にいる。しかし彼女も所詮は一人の女なのだ。それがついつい若者の侵入にスキを作ってしまったのだ。

作者はこの娘の愚かさを冷静に，距離をおいて描いているが，作者の目は彼女の母親にも向けられる。母親のホープウェル夫人も娘と同じく自分の信念を堅持している。それは「[この世に] 完全なものは何もない」「これが人生だ」「他の人にもそれなりの考え方がある」等々といった彼女の言葉に表れるもので，それはいかにも物事がわかったような，人生に悟りをもった境地にいる人のように見える。この性格から彼女は聖書のセールスマンを善人とみ，小作人のフリーマン夫人をも善人とみている。（当のフリーマンは彼女を批判的にみているのに。）それが娘の悲劇を呼ぶ遠因となっている。ホープウェル夫人の楽観的な観念は，物語の外からみているとどうも危うい感じが強い。彼女のいう「いろいろな人」の中には，われわれの前に暴かれたセールスマンの実体は含まれていないのだ。このホープウェル夫人が自足的にみえる観念をもつという点では「善人見出し難し」のおばあさんと同列にあるといえるだろう。

「善人見出し難し」はミスフィットとおばあさんが主たる登場人物だが，「善良な田舎者」では作品において直接的経験をもつハルガの他に二人の脇役がいる。ホープウェル夫人の考え方に疑問をもっているのはわれわれ読者だけでなくフリーマン夫人もそうだ。彼女についてホープウェル夫人は「善良な田舎者」と思っているが，果たして（夫人にとって）善良かどうかはわからない。彼女は「二つの表情」の持ち主で，それを場合によって使い分けている。彼女はホープウェル夫人が何かを云うとそれに口裏を合わせる。しかし彼女は醒めた目をもっているここでの唯一の人物である。ホープウェル夫人の「世の中が動いていくためには，いろんな人がいることが必要なのよ。わたしたちがみんな同じでな

いことはとてもいいことなの」（282）という言葉に対して，「よく似た人間も中にはいるものですよ」（282）と暗にホープウェル夫人の盲目性に警告を発している。エンディングにおいて，「悪臭のする」タマネギの若芽を引き抜きながら，「そんなに単純になれない人間もいる」（291）と云っている。マイルズ・オーヴェル（Miles Orvell）も云う[6]ように，盲目的な母娘と違って，フリーマン夫人はものを見透す目を持っている。ただし彼女のその目はハルガの義足に特別な興味を持ち，彼女の実体を「鋼鉄の先端のついた眼」で見抜き，変則的病気や不幸などに趣好をもつことにおいて一種の歪んだ感じ方，反応を示している。彼女は善人（？）のホープウェル夫人の愚かな明るさとは逆に暗い面をのぞかせたグロテスクな人物である。

「火の中の環」のコープ夫人もホープウェル夫人に似た人物だ。彼女は神を信じ，人は神に感謝しなければならない，と絶えず口癖のように言い，自分が農場を郡で一番手入れのゆきとどいた状態にしていると誇り，自分の努力・勤勉を自負している。このかぎりでは彼女は立派な人物だ。彼女は「鉄の肺に入って死産する運命にもないし，ヨーロッパを追い出されているユダヤ人の運命にもない」（190）ことを神に感謝している。

しかし彼女はこの身近な三人の少年たちの行為さえ自分の世界を破壊するものとして許さず，彼らを追い出そうとする。少年たちは単純に，近代的な都会の団地が嫌になり，広々とした農場でのびのびと何日かを過ごそうとしているだけなのに，一方では神への感謝を説くコープ夫人にはそれだけでも我慢がならない。少年たちが彼女の農園を取り巻く森に火をつけたのは，コープ夫人があまりに自分の農場に執着し（少年たちはそれは夫人の所有物ではなく神の所有物だと云う），森に対して（自分の物だと）権利を主張したからなのだ。

彼女の場合には自分の既得した物を少しでも失うまいとする意識が強いことが問題である。彼女がしきりに意識している彼女の農園を囲む森は象徴的に，彼女を防衛する“壁”となっている。その壁が少年たちによって突き破られたのだ。

「善良な田舎者」にはフリーマンさんという副人物がいたように，この作品にも主人公を冷静に眺める人物が配置されている。そのプリチャード夫人はコープ夫人のように素朴な（善良な？）楽観主義的な人ではない。彼女は侵入して来た少年たちの善性を信じていないし，主人公を批判的に見る役目をしている。彼女は「心の平衡状態を保つためには，ときおり血の味を必要とする」（189）のだというような現実的な醒めた考えをもっている。

「難民」の場合は構図は他の作品と異なっている。この場合平穏な世界に入って来る者は悪行をしない。するのは元からいた人間である。

この短編には話の焦点が二つ存在している。（これは第1部がもともと一つの話として書かれ，第2，第3部はまた別の話で，それらが難民の人物を共通の人物とすることによって一つに合成されたものである[7]。前半の主人公はミセス・ショートリーで，彼女は全体の主人公といえるマッキンタイア夫人の農場の酪農場の使用人である。

他の作品で主人公をつとめるような人物をここでは彼女がつとめている。彼女は使用人ながら，まるで農園の支配者であるかのようにその姿をわれわれの前に現わしている。

ショートリー夫人が丘の上に立って見ようとして道を登って行くと，クジャクが彼女の後について歩いてきた。前後に並んで動いているのをみると，それはまるで立派な行

列にみえた。腕組みをして，目立つ場所に立つと，彼女はその土地の巨人の妻かともみえ，それが何か危険がせまったという合図を受けて，その正体を確かめに来たとも見えた。彼女は二本の力強い脚で立ち，山のような自信をもち，大理石の胴は上になるにつれて細まり，さらにその上の方には二つの氷のような青い光る点があり，それは前方を突き刺すように，全てを見晴らしていた。午後の白い太陽はぎざぎざした壁のような雲の蔭を，まるで侵入者のようにこっそり動いていたが，彼女は太陽を無視し，視線をハイウェイから折れて眼下に伸びている赤土の道路にじっと注いでいた。(194)

このような一見堂々とした，支配者然とした女性の姿は，ここで取り上げた作品の多くに共通するイメージである。「注意は人のためならず」のクレーター夫人についてはあまり多くが描かれないが，この支配者然としたイメージは，彼女が「まるで太陽の所有者であるかのように」(146) 腕を組んでこちらにやって来る放浪者を見ている場面や，「その年老いた女性の三つの山は濃い青い色をした空を背景にして黒々としていた。そしてその山にはときおり様々な惑星や月が訪れていた」(150) という文章に表れている。これは彼女が小宇宙の支配者であるかのようなイメージである。

しかしショートリーの支配者意識はこの農場の女主人が雇ったヨーロッパからの難民であるポーランド人の出現によって脅かされる。この難民はひどく勤勉で，農業機械類の操作にも有能なので，彼女は自分の職場がこの新しい難民家族に奪われることに気を奪われるようになる。農場主マッキンタイア夫人はこのポーランド人の仕事ぶりに感心し，彼の賃金の額を上げたいと思うのだが，そのためには使用人のだれかを辞めさせなければならなくなる。

ミセス・ショートリーはこの難民に対して，そしてつまりはヨーロッパという世界に対してはなはだしい偏見をもっている。彼女にとってそこは「たえず戦いばかりやってい」て「まだ宗教改革もされていない」し，人々は進歩していないし，1000年前と同じ宗教を信仰しているところで，それらはすべて悪魔の仕業だ，ということになる (206)。だから彼女は黒人のほうに同情する，と云うが，これは彼女の都合のいい論理である。彼女の憎しみの鉾先はその難民の就業を斡旋した司祭にも向かっていく。

彼女の懐疑と恐怖感はますます昂まり，先鋭化し，それはグロテスクな相を帯びてくる。彼女の想念のなかでは，言語の戦争まで起こってくる。つまりそこでは「きれいな英語と汚いポーランド語が互いに戦い，英語は屍し累々の状態に敗北する」(209)。そして彼女はこの世界の意味，神秘なるものの存在に想いを致し，自分こその宇宙の神秘なる計画のために作られた勇者だという観念をもつようになる。彼女はすでに狂信的になりつつあるグロテスクな人物だ。

人間の誤った思い込みは恐ろしいものだが，外側から冷静にみると滑稽でもあることが多い。ミセス・ショートリーの場合も実に印象的なその一つの例である。彼女はついに以下のような幻想をもつに至る。

……空は舞台に掛かる緞帳が左右に分かれるように二つに割れ，そこに巨大な姿が彼女に向かって立った。その姿は午後も浅い太陽の色で，白っぽい金色をしていた。はっきりした形ではなかったが，それには火の車輪がついていて，それにはくっきりした

小さな黒い点があって，車輪がそれを軸にしてくるくると回っていた……（210）

「グリーンリーフ」のミセス・メイもこれらの他の作品の女性たちの類に漏れず，自分の問題・悩みをかかえていて，彼女の場合にはそれについては他の人物たちよりも多くの叙述がなされている。

彼女は夫がかつて値下がりし荒廃した農場を購入したとき，農業など何も知らぬまま彼と結婚し，彼が死んだ後，女手一つで農場を軌道に乗せたのだった。（都市に住んでいる彼女の友人たちは，「あなたは大した人だわ」と云っていた。）（321）

彼女が苦労してここまできたことを自負するのも無理はないだろう。（「わたしは息子たちのためにこの場所を失わないようにやっていくのに，汗して働き，奴隷のようにあくせく働いているのよ」（315）と彼女は云う。）

だが長い間苦労した人間によくみられるように，この「淡い色の近眼の，びっくりしたときの鳥のとさかのように，灰色の髪を頭のてっぺんに立てた小柄な」（313）この女性もまた頑固であり，使用人を含めて家族を統率，支配しようという意識が強い。

そのためかどうか，彼女の二人の息子は出来の悪い大人に成長してしまった。母親からみれば，二人ともまともな職業につかないでいる。兄は体が悪いため，知的な方面に進んだのはいいのだが，現在は田舎の二流の大学で教え，弟は保険の勧誘員になったのだが，それはもっぱら黒人相手の保険である。彼らは生活の面でだらしなく，出世意欲がなく，互いに口論し，ことごとに母親を馬鹿にしている。二人とも30代半ばを越す年齢なのに結婚する気配はさらさらない。現にいま母親は牡牛が敷地に入り込んで農場が荒らされるのを気に病んでいるのに，息子たちはそれを全然意に介しないのだ。彼女はたまらず自室にこもって涙を流すといった状態である。

ところが悪いことに彼女がこれまで15年間雇ってやってきた，ぐずでのろまの小作人のグリーンリーフの息子たちは，精力的に働く立派な大人になっている。この双子は二人とも大戦に従軍し，階級もミセス・メイの息子より上になり，今では二人とも従軍の報酬として，政府の援助による，小さくともきちんとした家に住んでいる。彼らはヨーロッパでフランスの娘をみつけて結婚し，子供たちは今修道院学校で学び，フランス語も話せるのである。まさに息子たちと比べれば両者の階層は逆転している。

これは彼女にとって大いなる羨みであり，彼女の気持ちは晴れない。オコナーの描く女性は多くが社会的階層についての意識が強く，下層の人々を蔑視するが，メイの場合も同じで，この息子たちのために彼女の人生の苦労感はいっそう増している。

メイには以上のような欠点はあるが，彼女が大きな罰を受けるほどの人間とは思えない。それは「善人見出し難し」のおばあさんにも，その他の主人公たちにも云えることだ。彼女たちはとにかく苦労して農場を切り盛りし，あるいは家族のことを熱心に考えているのだ。しかしオコナーは彼女たちをこのまま許しておくことはできないのである。あくまでも厳しく扱い，死と，あるいは落胆・絶望と引換えに神の恩寵を与えようとするのである。

「啓示」のターピン夫人も彼らに負けず劣らず欠陥をはらんでいる。彼女は自分はよきクリスチャンだと自認している。彼女は「すべてを今のようにしてくださった」神に感謝をしているし，多少の悩み（農場経営の）はあるけれど大体において現状を肯定し，満足している。彼女が最上の徳だと考えているのは善人であることであり，彼女は「助けを求

めている人間はだれでも助けてやる」（497）と思っている。彼女は自分の気立てのよさを自認し，「くる日もくる日も背骨が折れるほど働いて」きたし，「教会のためにも尽くしている」（507）と考えている。

しかしわれわれの前に表れているターピン夫人はいかにも思考が自己中心的であり，いつも自己を正当化していることが明瞭である。彼女はこの話の第1部に当る場面の，ある医者の待合室における表面的な会話とはうらはらに，強い階層差別意識，貧乏白人と黒人に対する強い蔑視観を抱いている。（彼女のこの蔑視観はこの日に限らず，ときどき自分の現在の社会的ステイタスを考えて感情が複雑になっていたのだ。）待合室における夫人の目は冷たく，それは順番を待ついろいろな階層の客たちにじろじろと向けられる。貧乏白人の親子，黒人の飲み物配達人，醜い顔の女子大生とその母親など。夫人は明らかにその客たちの頂点にあって，彼らを見下ろしている。

多くの作品で何度も繰り返されるが，主人公たちの気持ちがとらわれている階層意識がここで次のように集約されている。

> ときおりターピン夫人は夜中に人々の階層をきめることに熱中した。階層の山の一番下にほとんどの黒人がいた。彼女がたとえ黒人になったとしても，彼女はその黒人たちとは種類の違う黒人になっただろう。とにかくほとんどのものが黒人だった。それからこの黒人の隣に――上にではなく，ただ離れたところに――白人の屑がいた。それから，その上に，家を持っている人たちがいて，その上に家と土地を持っている人たちがいて，彼女とクロードはその中にいた。（491）

このストーリーに暗示される啓示への発端となったのは，この若い娘が読んでいた本を突然彼女に投げ付け，彼女をイボイノシシと呼び，首を締めつけようとした出来事なのだが，この娘にその乱暴をさせたのは，夫人のこの自己正当化的，スノブ的なおしゃべりなのだ。彼女はこの夫人のいやらしさに我慢の緒を切られたのだ。

以上みてきたように，オコナーの描くこれらの主人公たちは，総じてよきクリスチャンであるが，それは彼女たち自身がそう思っているだけで，これらの物語において多く視点をあずけられている全知者の目を通すと，彼女たちの信仰は表面的，独善的であることが暴露されている。「善人見出し難し」のおばあさんのキリスト信仰は慣習的社会の人々のそれと同じであり，無神論者であるハルガはセールスマンに向かって「あなたは完全なキリスト教徒だ。云うこととすることが違っている」（290）と皮肉なことを云う。「グリーンリーフ」ではミセス・メイは「宗教はおおいに尊敬しているよきクリスチャンだったが，もちろん宗教の何一つ正しいとは信じていない」（316）のである。彼女たちのキリスト教信仰と現実の行動が乖離していることは明白である。

常に神とつながっていると思っているにもかかわらず，神を信仰していると云うにもかかわらず，彼女らは人間の弱さや悪に気付かず，それらを許さないのだ。

また彼女たちは，ほとんどが農場主として登場しているが，自分が農場の責任者であるという自覚があり過ぎて，その結果誤りを犯している。「善人見出し難し」のおばあさんは農場経営者ではないが，彼女でさえ，大げさに云えば世界が自分を中心にまわっていると思っているような感じをわれわれに与える。そのために彼女たちには他人の心の中まで

深く見透すことができない。

先にも述べたが，彼女たちに共通しているのは人種的偏見が強いことである。ある者はまた，自分より下層の者たちを蔑視している。またある者はヨーロッパにたいする蔑視がある。これらの傾向は，彼女たちが多く独力で農場を経営してきたという自負の結果でもあるが，自分だけは正しいという意識，独善的意識が強くなり，頑迷な人間になっているのである。

3

以上述べてきたこれらの作品では，暴力に侵入される側の人物たちにいろいろ問題があることは確かだ。しかしオコナーの場合，描く焦点はこれらの暴力的侵入者に向けられるのではなく，（例えば『冷血』などとは異なって）侵入される側に向けられる。（ただし「難民」「善人見出し難し」は違って，侵入者にも向けられるが。）つまり彼女の作品では，その暴力が加えられることによって引き起こされる主人公の精神的変化，あるいは認識の変化，あるいは啓示（オコナーの言葉では恩寵）に焦点が当てられ，それらの意味を暗示的に示すというほぼ似たようなパターンで話が作られている。侵入する側の存在は割合単純なものであり，その存在についてはこれらの小説が多くを語ることはない。たとえ描写があり，説明があり，侵入者について頁がさかれるとしても小説の意味の上での焦点はそこにはない。

しかし「善人見出し難し」の場合，その侵入者のミスフィットは他の作品に比較して多くのことが描かれるので，ここでは多少の説明が必要であろう。他の侵入者たちと違って，彼はもっとも暴力的であり激しい。そしてそれだけ読者を驚かせる。ここでは神についてのおばあさんの信念が慣習的なものに過ぎないものであり，それが人の世の現実を知っているミスフィットの神の不信と対立する。この作品に暗示される啓示の前の二人の対立・相克は深刻で，議論は白熱し力がこもる。「あなたは善い人だ。すこしも卑俗な人ではない」というおばあさんの言葉から発した宗教的な議論の，その会話におけるミスフィットの中心的な主張は，この世界は不公平にできているという認識である。彼はこう言う。「おれは自分のことをミスフィットと呼んでいるんだが，それは何故かというと，おれがこれまでしでかした間違いの全部を合わせたって，おれがこれまで罰として受けてきた全部には釣り合わない（misfit）からなんだ……」（131）と。

彼の論理は，「イエスはすべてのバランスを崩したんだ。おれもイエスも同じなんだ。ただイエスは犯罪を犯さず，おれには［犯罪の］書類があるから犯罪を犯したと奴らは証明できるということだけが違うんだ。もちろん奴らはおれに書類を見せたためしはないが」（131）。「イエスは死者を甦らせたたった一人だが，そんなことをすべきじゃなかったんだ……もしそれが本当ならおれは彼に従うよ……，うそだったらおれは楽しくやるだけだ。人を殺したり，人の家を燃やしたり，その他悪いことをやる他に楽しみはない」（132）等々である。

悪人ミスフィットはこのような思想をもつ男で，おばあさんも言っているように，彼には気品のある態度がみられ，ただの目暴自棄の殺人犯ではない。（彼は鉄ぶちの眼鏡をかけ，学者風である。）だがはたして彼のこのミスフィットだという世界観を認めてよいも

のだろうか？

オーベルは，ミスフィットの論理は荒過ぎる論理で，そこでは完全な信仰と完全な不信仰の間の区分があまりにはっきりし過ぎていて，その中間地帯（領域）がない。中間とはたとえばヒューマニズムだが，それはオコナーにとっては，自己欺瞞や自己崩壊になるのだ。この点を理解しなければわれわれはミスフィットを歪んだ論理，歪んだ神学の持主と読み違いそうになる。しかし彼が誤ってその論理を行使するようになるなら，その行使の論理そのものが冷酷なのだ[8]，と言う。

神の存在についての議論が進行して，彼が拳で地面を叩きながら，「もしおれがそこ［キリストが死者を生き返らせた現場］にいたら，おれにだって信じられただろうし，おれは今のおれみたいにはなっていなかったろうよ」（132）と言ったとき，一瞬ミスフィットの気持ちはぐらつくようにみえる。おばあさんは「その男の顔がまるで泣き出すかのように，彼女の顔のすぐ近くで歪む」（132）のを見る。彼女は突然その男に「あなたはわたしのこどもの一人だわよ」（132）と云う。この瞬間おばあさんにはこの男も彼女も神の下の同じ人類の一人であるという感じが啓示的に閃いたのである。そしておばあさんの手が思わず伸びてミスフィットの肩に触れる。

オコナーによれば，このゼスチャ（手の動き）がこの作品の最大の問題点であって，作者はこの動作がなければ，この話そのものが成り立たないと云う。この直後彼はおばあさんを射殺することになるのだが，この動作は彼女を殺害したミスフィットの心の中で「カラシ種のように，ぐんぐん伸びてやがてカラスの群がる樹木となり，彼に大きな苦しみを与え，彼は予言者になるだろう」と言っている[9]が，このことがオコナーが作品で云わんとすることであり，この作品が残酷さを売り物にする話ではないことがわかる。

ミスフィットにとってはおばあさんのこの動作が彼のすべてのバランスを崩す。ミスフィットには，それは蛇（悪魔）の誘惑（もちろん旧約聖書の）と映る。彼はそこで反射的におばあさんを撃つが，それは彼の秩序感からいえば，一瞬ぐらつきかけた彼の秩序を元に戻したことになるのである。

しかしこの話がはたして読者に受け入れられるものかどうかはわからない。作者はそう言うが，一般の読者はこの作品はあまりに宗教的な解釈による話ではないかと思ってしまう。あの残虐な情景――特に森の中から聞こえてくる銃声はひどくリアルで臨場感があり，恐ろしい音声だ――とこの作者のコメントとの間にはどうしても乖離がある。この点についてオーヴェルはこの種の作品の効果を決定するのは難しい，この後半部はサテリカルなものだから，家族の死をあまりセンチメンタルに受け取るのはよくない。この殺人犯はコミック・キャラクターだから[10]，と書く。そして彼のコメントを借りれば，たとえばある評者（Elizabeth Hardwick）はこれはファニイ・ストーリーだと評しているという。ファニイだと思わせるのはミスフィットの残酷さと残虐性が，ドラマの中の抽象的な理論によって，また醒めた客観的な描き方によって抑制されているからだ，と。しかしそれでもなお描かれる情景の残酷さは否定できない，とオーヴェルは述べている。つまりこの作品は解釈が容易なものではないことは間違いないだろう。オーヴェルによるとオコナー自身はしかし「これはコミックで様式化した（stylized）作品です。自然主義的な［リアリズムの？］話ではありません。だから残酷だとは言えません」と語っている[11]。

私見を述べればこの作品は，作者の意味しようとするところはわかるが，それが構成及

び文体とあまり合っていないのではないかと思う。前半のリアリスチックな文体と，後半の神学的会話とミスフィットの人物造形の点においてどうもしっくりこないと思えるのだ。オーヴェルが端的に書いているように，「それでもなおわれわれは，おばあさんの死体が転がっている血溜まりを否定できない」[12]，というのが正直な気持ちでもある。これはこの作品がオコナーの短い創作の期間でも比較的初期（1953年）に書かれたことからくるのかもしれない。

その他の作品については「善人見出し難し」ほど異和感を与えるものはない。

「火の中の環」の中では森が燃え上がるのを見てコープ夫人は仰天するが，少女は母親の顔に「みじめさ」（misery）を認める。その表情はコープ夫人のものではあったが，「だれのものであってもいいようなもの」「どこかの黒人か，ヨーロッパ人か，あるいはパウエル自身のみじめさであってもいいように」（193）少女には見えたと書かれている。つまりこのみじめさはこの世の万人の不幸の表情と同じものなのである。

この話は少女の視点から描かれたものだが，それがなぜ少女にあるのかその必然性は不明瞭だ。母親と違って，少女の耳には少年たちの「激しい歓喜の叫び声」が聞こえ，少年たちは「燃えさかる炉の中に，天使が彼らのために切り開いてくれた丸い空所（サークル）で踊っている予言者たち」[13]（193）と映る。

母親の顔に浮かんだこの表情こそが，暗示的ながらこの作品のもつ意味をあらわしている。「この破壊はついにコープ夫人を苦難に対して無防備にし，彼女の苦難は世の中にある苦難と一緒になったのだ」「この惨めな経験は，潜在的にしろ，人間を離れ離れにしているわれわれの支配欲（権威欲？）や個人的安全欲を癒す力をもっている」というマクファランドの解釈がある[14]がそれが妥当であろう。

「注意は人のためならず」は単純（これは「善人見出し難し」と同じ道中もの）だが，終わり方はペンデングといった感じがする。その意味はどうも理解しにくい。

家と無垢な娘を手に入れてはどうかというルシレル夫人の誘いに答えて，流れ者シフトレット（Shiftlet）は「人間は肉体と精神（魂）の二つに分かれているのだ。肉体は家のようなもので，どこへも動いて行かないが，精神は自動車のようなもので，いつも移動しているのだ」（152）などと云う。そして娘を貰ってくれれば，車をあげるという夫人の言葉には，彼は今度は「蛇のように」，云いたいのは魂が何より大事だということだ，と方向を変え，（魂が命じるままに）娘を週末が来るまで外へ連れ出すと言い出す。この場面は双方虚々実々の会話でユーモラスである。この男もペテン師の一人だ。

この話の結末は，これはミスフィットによる一家の殺害，聖書のセールスマンによる義足持ち逃げ，少年たちの森への放火と同じで，舞台の上では啓示も何も明らかにされない。しかしここのエンディングにおいては，この男は神の罰を感じているようでもある。これはミスフィットやセールスマンには描かれなかったことだ。

白痴の娘を置き去りにした後，流れ者のシフトレットはさすがに気が沈み，滅入っている。その後ろめたさからか，彼は「車を走らせる人間は［だれかを乗せてやる］責任があると思う。途中で少年を乗せるが，少年はシフトレットの気持ちが一方的だからと怒って降りてしまう。少年が嫌になったのは，シフトレットがしきりに母親というものを賛美し始めたからである。

彼がなぜ母親を賛美したかというと，彼の心の中には，娘を置き去りにしたときの，店

のボーイの言葉「[彼女は] まるで天使のようですね」(154) という言葉が引っ掛かっていたからだ。ここには啓示とは云わないまでも，一種の開眼があると云っていいだろう。

少年が怒って車を降りてしまった後の情景の描き方がいかにもオコナー風である。空は曇り，嵐が襲ってくる。「雲がひとつ，少年の帽子とそっくり同じ色の，かぶらの形をした雲が降りてきて太陽を隠し，そして別の，もっといやな感じの雲が車の後ろに垂れた」(156)。その時彼はこう思う。「この世の腐敗が彼を飲み込もうとしている」。彼は十字を切り，「神よ，姿を現し，この地上の泥を洗い流してくれ」と叫ぶ。すると雷鳴が轟き，篠つく雨が落ちてきて，その雨の中，車を走らせる。彼が自分の残酷な行為を反省したとは示されないが，ここに暗示されるのは，人間に対する神の怒りなのであろう。(15)

ここには「善人見出し難し」にあるような急激な展開もサスペンスもなく，結末にもわずかにミステリーがあるだけだ。これはろくでなしの主人公にたいするサタイヤである。

先ほど述べたように，二つの話を合体させた「難民」の一方の主人公，農場主の使用人のミセス・ショートリーの物語は彼女の死をもって終わる。彼女はたまたまマッキンタイア夫人が司祭に，夫人が彼女たち家族を解雇しようと決めたと話しているところを立ち聞きし，それならそれで先手を打とうと，夜が明けぬうちに車に家財道具を満載して小屋を出ていく。彼女がなぜこうするのかは多少疑問だが，自分がおめおめと解雇を言い渡されることは，彼女の自尊心には耐えられない屈辱だったのだろう。

農場を出た後すぐに，彼女は（多分心臓の）発作で息絶える。作者はその死について「彼女は大いなる経験をしたのだ。あるいは彼女のものであったすべてのものから，世界に追放され難民となったのだ」(214) と書いている。「はじめて自分の本当の国の，途方もなく遠くの国境をじっと考えているよう」だと。つまり彼女はここで真の認識を得たのだが，それは皮肉にも死を代償としなければならなかったのである。ごたごたと山のように積んだ車の上での彼女の苦悶の死に様は，ユダヤ人虐殺のガス室の死体の屍し累々とした様と重なることは，ヨーロッパを蔑視していたミセス・ショートリーが，このポーランド人の同胞と同じ経験をしたことを意味するだろう。

この短編集に収めるために拡大されたヴーションの後半，つまり第2・第3部の主人公は農場主マッキンタイア夫人である。

使用人のミセス・ショートリーには使用人という身分にありながらも，支配者然としたところがあったが，マッキンタイア夫人は文字通り自分が「すべてを統一している」，「自分が全ての紐を統御して握っている」と自覚している。使用人たちが生きていけるのも自分のお陰だという意識だ。彼女にはそれまで三人の夫がいた。彼女は農場の経営で苦労は多かったが，ポーランド人の難民を雇うことによって，その苦労も終わったと喜んでいる。彼女の不満は「この世には人間が多すぎる」(217) ことで（「彼女はこれまでずっと人間の過剰と闘ってきた」），しかし世の中は変わりつつあり，頭がよくて，節約家でよく働く人間しか生き延びることはできないと思っている。お金があらゆる悪の根源と彼女は思っているが，彼女がポーランド人を雇ったことで喜んだのは，彼の家族のためを思ってではなくて，彼の勤勉さによって自分の家の出費を節約できて助かるからである。

この話は悲惨な事故で終わるが，それはマッキンタイア夫人の歪んだ考えが原因である。その発端はポーランド人がヨーロッパに残してきた自分のいとこをこの農場の黒人と結婚させたいと考えていることを知ったことである。つまり人種の問題が悲劇につながるので

ある。(しかしこれは当時としては無理もない考えと思われる。) 彼女にとってそれはそれまでの彼女の依って立つ秩序を大きく破壊することである。ここでもオコナーの多くの作品にみられる，慣習的な社会的なバランスがくずれるのを怖れる人間の例が描かれるのだ。

その怖れから彼女はあれほど気に入っていたポーランド人に不満を抱き，それが昂じて，司祭に対しても懐疑心をいだくようになる。彼女は司祭に改宗させられることを，ミサに出るようにさせられることを怖れ，ミセス・ショートリーが死んだのもポーランド人のせいにし，いまではせかせかと働くポーランド人が彼女の気持ちをいらいらさせるようになる。

しかしマッキンタイア夫人の心の中ではポーランド人を解雇したいという気持ちと，それが背徳の行為だという気持ちが葛藤を始める。彼女は眠れぬままに夢を見，その夢では司祭からなぜ同情すべき難民を追い出すのかと責められる。「何千というあの人たちのことを考えてみて下さい。ガス室と箱貨車と収容所キャンプと病気で苦しんでいる子供たちとそしてキリストのことを考えて下さい」(231) という司祭の声が聞こえる。

しかしついに彼女はポーランド人を辞めさせることに決し，それを言い渡すために機械小屋に出向き，そこで惨事をみることになったのである。

トラクターによる轢死は偶然なのか，使用人ショートリーの故意によるのかわからない。人によって想像は異なるだろうが，その微妙な描写によると，夫人には故意を認めようとする気持ちも混じっているように思われる。後になって彼女は，ショートリーが「復讐こそ私の望みだ，と主は云われた」(233) と云っていたのを思い出しているからである。

この事故によって主人公のマッキンタイア夫人は，精神的苦痛のために入院し，退院後は牛を売り，使用人たちはすべて農場を去り，彼女はただ一人残った財産で暮らすことになる。彼女にもはや生きる気力はない。

ここでは難民をめぐる人々の独善的な思惑が彼を死なしめ，その災禍が彼ら自身に及んだのだ。

すでに読者の共通理解になっているように，この死するポーランド人はキリストのシンボルとして考えられている。この難民は勤勉で善意の人であったが，世間にあっては余計者であり，俗的な世間の誤解を受けたのだ。そして彼は自己中心的な人々の迫害を受け，彼らの犠牲者となった。残された人々は救われたのだろうか。この作品ではそれをわれわれは期待できない。めずらしく希望的な暗示もなく終わっていて，難民を取り巻く人々の独善性だけが浮き彫りにされている感が残る。

「グリーンリーフ」においてはどうだろうか？ここでも啓示的なものは必ずしも明らかではない。メイ夫人は小説の最後の，牡牛が突進して来る場面で，「じっと動かず，ただ凍りついたように，信じられないといった気持ち」でその「向かって来るものの意図が何なのかわからず」ただ見ている。そして角が彼女の体に突き刺さるとき，「突然視力が戻ったが，光がまぶしくて耐え難い」(以上333) といった人のように，前方を凝視するだけである。ウィットは，メイ夫人はこの光の中で神への道の極点に到達したことを暗示していると云っている[16]。

オコナーの作品において，啓示はこのように瞬時的に，きわめて暗示的に，一般の読者がそれを見逃してしまうような描き方で示されるが，文字通り「啓示」という短編では，それがより明確な形となってはっきりと示される。

“醜い”娘の「老いぼれのイボイノシシ」という言葉は寸鉄人を刺して，ターピン夫人にとっては大いなるショックを与える。彼女は家に帰ってもその屈辱にとらわれて煩悶する。自分がけしてイボイノシシに喩えられるような存在ではないと思おうとしてもできないのだが，それはその娘の声が低くとも「はっきりした」ものであって，間違いなくそれが自分に向けられたものであったことが彼女自身にはっきりわかったからである。イボイノシシが当てはまるのは自分よりも他に大勢いるではないか，と彼女はその不当性を非難する。しかし彼女がその娘の眼を見たとき，「娘が自分を知っていること，時間と場所と境遇を越えて，何か強烈な，そして直接的な方法によって知っていること」（500）が彼女にははっきりわかったのである。彼女は「あたかも啓示を待つように」じっとしていたのだ。

ターピン夫人がその午後から夕刻にかけてずっと心の中に引きずっているのは，あの侮辱が向けられたのが何故自分なのか，なぜ劣等な人々ではなく，「わたしが」選ばれたのかという疑念と怒りである。豚小屋でヒステリー的になって，嫌がる子豚にホースで水を当てながら，怒りはついに神にさえ向けられるまでに昂まる。「あなたはいったい自分を誰だと思っているの？」と彼女は叫ぶが，「あなた」とはだれを指しているのか？叫んでいる対象は明瞭ではないが，それはあの若い娘ではなく，むしろ姿を見せないもの，神に向けられているのだろう。最後の言葉は森の彼方から彼女にこだまとなって返ってくる。そのときその言葉はとりもなおさずターピン夫人に向けられた問いと化すと考えられる。ターピン夫人は自分をいったい何者だと思っているのか？

ターピン夫人はそのとき汚いと嫌われる親豚と子豚が一つに固まり静かで平和でいるのを見る。そして次に彼女は太陽が沈んだ後の夕空に，ある幻想を見るのである。

> その［紫色の］条は燃え盛る空を突き抜けて，地上から天に向かって伸びて揺れている巨大な橋に見えた。橋の上には様々な魂の群れが争うように天に向かって昇っていた。そこにはあらゆる人々の群れがいた。生まれて初めて清潔になった屑の白人がおり，白いローブを着た黒人の群れがおり，大群の奇形や気違いの人間が叫んだり，手を叩いたり，蛙のように跳んだりしていた。その行列の最後には，彼女自身やクロードと同じようなすぐそれとわかる人種の群れがいて，彼らはいつもいろんなものを少しずつ持ち，正しく使うように神から授かった知恵を持っていた。（中略）彼らは他の人々の後ろから進み，大いなる威厳を持ち，今までと同じように，秩序と常識と上品な振舞の責任を負っていた。彼らだけがきちんとしていた。けれども彼らの顔は驚愕のために変わり果てていて，彼らの美徳さえもが焼き捨てられつつあるのが彼女にはわかった。（508）

この幻想によってターピン夫人は明らかな啓示を受けたといえるだろう。他の作品にもまして，この作品（これは『善人見出し難し』の作品群からおよそ１０年たっているものであり，そしてほぼ彼女の最後の作品なのだが）はその啓示性が一層はっきりしている。ここではそれまで極めて暗示的で未完成に思われた啓示が堂々たる幻となって描かれている。夫人の中心的観念は人種差別，下層階級蔑視であったが，この誤てる意識は彼女が軽蔑し，哀れんでいた“醜い”若い娘の言葉によって，覚醒させられ，打ち砕かれたのである。メアリ・グレイス（Mary Grace）という名前の娘の存在はその名に表されているよう

に，タービン夫人にとっては神の恩寵だったのだ。

さて先ほど述べたように，たとえば「難民」の死せるポーランド人は，すでに読者の共通理解になっているように，明らかにキリストのシンボルとして考えられているが，オコナーのほとんどの作品において，暴力的な人物や物が，神の啓示あるいは恩寵をもたらすがゆえに，神またはキリストを暗示あるいは象徴することが多い。

「火の中の環」の少年たちは恩寵をもたらす神の天使であり，「注意は人のためならず」の流れ者は片方の腕と残った半分の腕を水平に広げて，歪んだ十字架の姿を示しており，「善良な田舎者」のセールスマンは，水の上を歩くキリストのイメージを与える[17]ように，沼地を横切って去って行き，「啓示」のグレイスはわざわざ醜い姿をして現れる神のメッセンジャーとみえる。

「グリーンリーフ」の牡牛も明らかにその一つである。この暴力的侵入者は作品の最初から，キリストと符合する描写がなされている。はじめて主人公が牛に気付くとき，牛は「なにか我慢強い神のよう」で「その角には，生け垣から首をはずしたときの枝の環が冠のようにからみついて」（311）いる。またグリーンリーフの女房がグロテスクな祈りを上げて，「キリストさま，キリストさま，どうぞわたしの心臓を突き刺して下さい」と叫んでいるとき，「その声はまったく身を貫くようで，彼女［メイ］には，何か激しいものが大地から解き放たれて彼女に向かって突進してくるかと思えた」（316）と書かれているが，この文章が牛の突進とダブってくるのをわれわれは抑えることができない。

メイ夫人も表面的には「よきクリスチャン」であるが，作者は彼女の宗教的態度を，グリーンリーフの妻のそれとを対比的に描いている。この大柄でだらしのない女ミセス・グリーンリーフを彼女は「顔も見たくない」ほど嫌っている。ところがこの女は“祈祷療法”というものに熱中している。これはひどくグロテスクな行為と描かれるが，この女は新聞から世俗のあらゆる悲惨なニュース（レイプされた女，脱走した犯人，焼死した子供たち，列車事故，飛行機の墜落，映画スターの離婚などの）を集め，それを土中に埋め，その上に腹這いに寝て，涙を流しながら神に祈るというものだ。

たまたまその場に居合わせたときのミセス・メイの反応を叙して，作者は「ジーザスという言葉は（中略）教会という建物の中でだけ口にすべきものと彼女は思った。彼女は宗教に大いなる尊敬心をもっていた。もっともその宗教の何一つとして本当だとは信じていなかった」（316）と書いている。ここで作者はミセス・メイの，教会を中心とした社交的な場所における宗教を，このグロテスクなミセス・グリーンリーフのそれと対比させて，それを批判している。ちなみにウィットは「彼女［グリーンリーフ］は自分のキリストの癒しの力と直接的にコミュニケイトしている。キリストの神秘的な力を神性として重視し，その力がこの世の悪を正すと受け止めている」と論評している[18]。ミセス・メイが信仰が自分の利になるようにそれに対処しているのとは違っている。

以上述べてきたように，オコナーの作品には暴力が大きな働きをしている。彼女がなぜそのように激烈な暴力を使用するかということについて，彼女自身がつぎのように書いている。

現代の小説でこれほど暴力が多用される理由は，それは［暴力を］用いる作家によ

って異なると思うが，わたしは自分の書く物語において，暴力は不思議にも私の登場人物たちをリアリティに連れ戻し，人々に神の恩寵を受け入れるように準備させることができるということを知ったことだ。人々の頭はひどく硬いので，暴力以外のものでは何の効き目もないのだ。[19]

再びたとえば「善人見出し難し」についてふれれば，ミスフィットの出現までは，文字通りこの作品はリアリズムの筆法として読めるだろう。しかしそれ以後の，おばあさんのミスフィットに対する態度は現実的とは言い難い。またあのように非情で残虐な行為を犯す者が，誤りを含むとはいえ，あのように洞察的な考えをもっていることも現実的とは思えない。また些事ではあるが，話の構成――一家が道に迷ったところに怖るべき脱獄犯が来合わせること――も具合がよすぎる。従ってこれは，深刻に読むと残酷過ぎる話ともなり，「6人も殺されたがファニーな話」[20]ともなるのだ。

しかし残酷な話であろうと，ありそうもない話であろうと，オコナーにとっては，このような物語がリアリティをもつものなのである。彼女にとっては，あくまで作品の最後に現れる啓示あるいは神の恩寵を描くのが，文学の生命なのであって，暴力はそのための一つの方法なのである。彼女はこうも云っている。「この考え，つまりアリティとはわれわれがかなりな犠牲を払ってでも戻らなければならないものだという考えは，気軽な読者にはめったに理解してもらえないのだが，それはキリスト教の世界観のなかでは当然のことなのだ」[21]

だから非キリスト教徒である一般の読者にとっては，彼女の作品は“恐ろしい”話であり，刺激が強過ぎ，理解しにくいものともなるのである。

注

(1) 拙論「カーヴァーとオーツ：暴力をめぐって」（筑波大学アメリカ文学研究会『アメリカ文学評論』第17号

(2) たとえばGreg Johnson, *Joyce Oarol Oates: A Study of the Short Fiction*（Twayne Publishers, 1994）を参照。

(3) Margaret Earley Whitt, *Understanding Flannery O'Connor*（University of South Carolina, 1995）, p. 5.

(4) ちなみにこのタイトルは1950年代にアメリカの高速道路に立てられた標語であるとのこと。Whitt., p. 52.

(5) Flannery O'Connor, *The Complete Stories*（Farrar,Straus and Giroux, 1971）. 以下オコナーの小説作品の本文からの引用については，その頁は（　　）に数字で示す。

(6) Miles Orvell, *Flannery O'Connor: An Introduction*（University Press of Mississippi, 1991）, pp. 140-141.

(7) Whitt, p. 79.

(8) Orvell, p. 133.

(9) Flannery O'Connor, *Mystery and Manners*（RINSEN BOOK CO.KYOTO, 1992）, pp. 112-113.

(10) Orvell, p. 134.
(11) Ibid., p. 210, (note, 12).
(12) Ibid., p. 134.
(13) この「燃えさかる炉」は暗に旧約聖書中の故事からの引用である。ダニエル書第3章。ネブカドネザル大王は自分の命に従わない3人のユダヤ人の捕囚シャデラック(Shadrack), メシャク (Meshach), アベドネゴ (Abednego) を燃える炉の中に投げ込んだが, 彼らは全然燃えもせず火の中を歩き回っていた。ここの3人の少年はこの捕囚にあたり, コープ夫人は大王にあたる。大王は黄金の像よりも強い神が存在することを悟る。
(14) Dorothy Juck McFaland, *Flannery O'Connor* (Frederick Ungar Publishing Co., 1976), p. 29.
(15) ちなみに「注意は人のためならず」はかつてテレビドラマ化されたことがあったが, そこでは主人公は心変わりをし, とって返して娘を引き取りに行くというハッピーエンドになっていた。McFaland, p. 25, Whitt, p. 52 参照。
(16) Whitt, p. 126.
(17) McFaland, p. 40.
(18) Whitt, p. 125.
(19) *Mystery and Manners,* p. 112.
(20) Whitt, p. 44.
(21) *Mystery and Manners,* p. 112.